

妙力寺境内地に眠る1500年の歴史

つか わき 塚脇F1号墳

せつ つきよう おび し やま つかわき こ ふんぐん
摂津峡を西に望む帯仕山一带には塚脇古墳群と呼ばれる古墳時代後期に
築かれた古墳が数多くあります。その中で最も重要な位置を占める古墳が、
みよりき し けいだい
妙力寺境内の北側にある塚脇F1号墳です。



塚脇古墳群

塚脇古墳群は、帯仕山から芥川^{あくたがわ}西岸にかけて点在する約50基の古墳で構成される古墳群で、横穴式石室を埋葬^{まいそう}施設として6世紀後半から7世紀にかけて築されました。

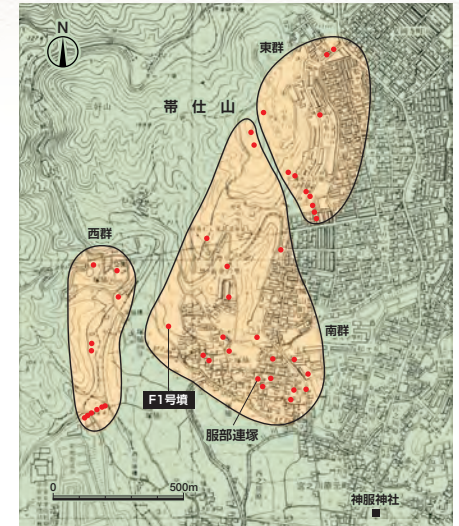
帯仕山の南西^{ふもと}の麓に位置するF1号墳は、塚脇古墳群の中では最大規模を誇る古墳で、他では見られない豪華な馬具^{ばぐ}などの副葬品^{ふくそうひん}が出土していることから塚脇古墳群を解明する重要な手掛かりとなる古墳です。

F1号墳の被葬者

帯仕山の南に広がる地域は「服部^{はっとり}」と呼ばれていますが、この地名は古代の機織りの手工業集団をさす服部(はとりべ)に由来した名であると考えられます。

また、服部の始祖・麻羅宿禰^{まらすくね}を祭神のひとつとする神服神社(通称:神服神社^{かむはとり})や服部連塚^{はっとりむらじづか}と伝承される古墳があることから、古墳時代後期に機織りの先進技術^{たずさ}を携えた渡来系^{とらいけい}の人々がこの地に移り住み、かれらが塚脇古墳群をつくったと考えられます。

F1号墳は塚脇古墳群の中で最も古く、特殊な墳丘や豪華な副葬品が出土した古墳であることから、機織り技術^{ほうむ}の指導者が葬られた可能性が高いといえます。



塚脇古墳群の分布



服部連塚



神服神社